

PSIV-16

住民意志を反映させたプランニングの試み

——— 栃木県栃木市、蔵のあるまちづくりから ———

㈱地域開発研究所 正員 兼子 和彦
 同上 伊納 浩
 同上 正員 ○青田 浩光
 栃木市企画課 和賀 良紀

1. はじめに

まちづくりは人づくりと言われるように、住民主導によるまちづくりが理想とされるところではある。住民は往々にして、地域の特性や良さに気がつかないため、どう住民の意識を反映させ、どうプランづくりに巻き込むかが重要であると考えられる。栃木市においては、ここ4～5年の各種調査から、栃木市の固有性が蔵の街並みにあること。そしてこれを活かしたまちづくりが適切であることが指摘され、ここに至って栃木市のまちづくりの方向性が明確になってきた。こうした背景の基に、「誇れるまちづくり事業」の計画策定にあたって試みられた住民意志を反映させるプランニングの過程を紹介するものである。

2. 栃木市の概要

栃木市は東京の北約70Km、東武鉄道を利用すると1時間程度の首都圏に位置する。人口は約8万6千人であるが、明治の一時期県庁が置かれ物資の集散地として栄えた。当時、旦那衆が財産保護

の目的で建てたのが耐火建築である蔵であった。

現在、当時の面影を今に伝える蔵の数は450棟（中心街）を越えるとも言われ、町を南北に流れる巴波川と共に、栃木市の風情を決定付けている。しかし、近年目に見えて蔵の取り壊しが進み、その対応策が急がれている。

3. 計画づくりの組織体制

住民の意志を反映させるため、設定したモデル地区の中から代表者を選出し、他に地元有識者と学識経験者の計16名からなる計画策定の実戦部隊としての連絡会議と、その計画の意志決定機関として、各種団体の代表、地元企業、学識経験者の計26名からなる委員会を組織した。（図-1）

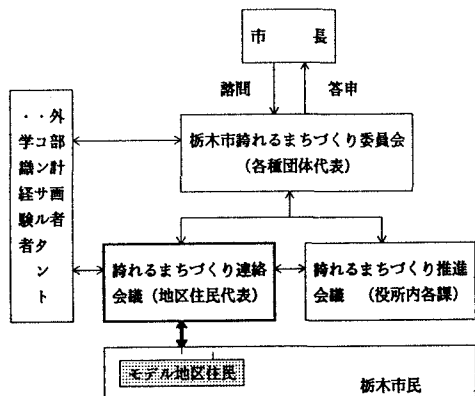


図-1 計画推進体制

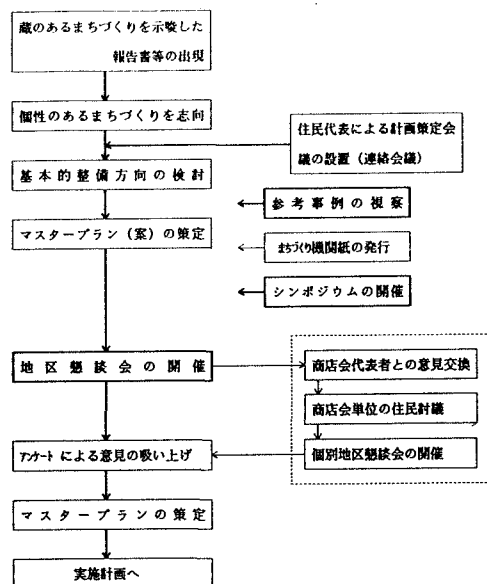


図-2 住民意志を反映させた
プランニングフロー

4. プランニングプロセスとその効果

(1) プランニングプロセス

連絡会議において、議論の題材や視点を得る意味で参考事例の視察を行った他、一般市民に対する啓蒙運動として、機関紙の発刊およびシンポジウムを企画した。連絡会議は月に一度定例会を持ち、上述の一連の活動を通して、町並み整備の基本方針案を策定した。さらに、この基本方針を地区懇談会に降ろし、意見の吸い上げを行い、最終的なマスタープランが策定された。（図-2）

(2) 視察とその成果

連絡会議のメンバーを中心に、栃木市と同様町並み景観の統一美を有する都市の視察を行った。そのねらいと成果は図-3の通りである。

(3) シンポジウムとその成果

パネルディスカッションではスライドが用いられ、京の町家のモダンな活用方法をビジュアルに写し出したことにより、これまで古臭くてお荷物とされていた蔵の利用の仕方に具体的な示唆が与えられた。こうした事が、実際例を視察に行くなど前向きな姿勢を促す意味で大変効果的であった。

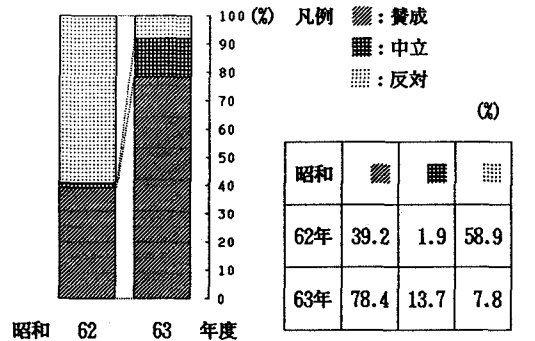
(4) 地区懇談会とその成果

地区懇談会開催に当たって、先ず地区住民の間

で事前協議を行い、計画に対する疑問や提言をまとめる時間を与えた。

地区懇談会は7つの地区で行われ、3つの内容により構成された。先ず、計画の主旨を説明し、次いで連絡会議の代表と学識経験者による補足説明があり、最後に蔵の活用事例を、連絡会議の視察によるスライドを中心に示した。その後意見を網羅する目的で、アンケートを行った。

この時のアンケート項目の中で、計画の是非を問い掛けたところ、昨年別途調査において実施されたアンケート結果に比べて、飛躍的な賛同の意志表示が得られた。理由として、住民の不安を和らげた連絡会議および学識経験者の後押しと、スライドによる蔵活用方策の提示によるところが大きいと考えられる。（図-4）



母数：昭和62年 289人（個人経営の商店主）
昭和63年 52人（大通りににおける個人経営の商店主）

図-4 コンセンサス形成の遷移

5. まとめ

栃木市の蔵のあるまちづくりには、これまでの各種調査に見られる気運の盛り上がりの上に、大きく2つの段階があった。それはプランニングへの参加とこれを支援する視察やシンポジウムの企画等を通じた連絡会議委員の意識の変化の段階であり、また地区懇談会への連絡会議委員の働きかけによる住民啓発の段階であった。

地区住民のコンセンサスが得られた大きな要因は、連絡会議の設置による住民意識を反映する試みであったと思われる。

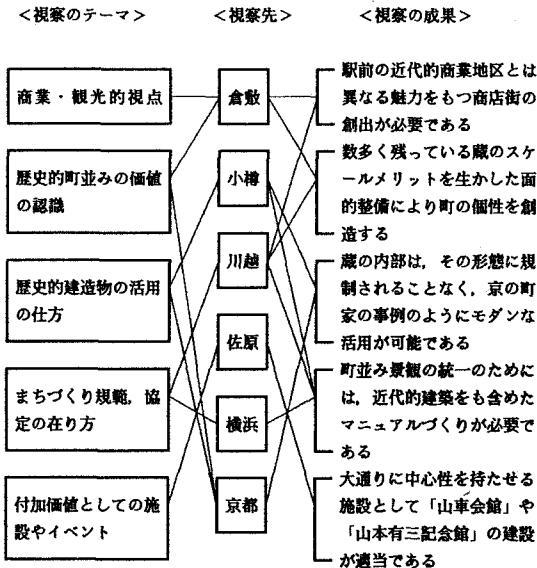


図-3 参考事例視察の目的と成果